

●特別賞〔論文概要紹介〕

ICTで学校が変わる ～これからの社会に対応する 力の育成～

埼玉県越谷市教育センター おおにしひさお
大西久雄

【実践の概要】

今、学校教育現場は様々な課題や要求に日々直面している。学校が主体となり自力で解決しなければならないが、今日的課題の多様さ、複雑さは学校が持ち得る課題解決能力を超えていることも事実である。

その課題の中には、「社会の変化に対応する能力」がある。これは、未来を生きる子どもたちにとって必要な力であり、学校現場でいかにその力をつけるか、その方策が求められている。

私は、前任校の越谷市立大袋中学校長として、この「社会の変化に対応する能力」を以下の4点と分析した。①思考力・判断力・表現力、②自らの身を自らが守る力、③コミュニケーション力・人間関係調整力、④情報活用・編集力である。

これらの力を学校単独でなく、学区地域のみならず大学、企業等との連携で育成していく取組を展開した。特に、ICTを糸口として社会関係資本を学校に取り入れる仕組みづくり『大袋中コンソーシアム「つどい」』により、子ども、教職員、保護者、地域が大きく変化した3年間の実践である。

【論文内容の紹介】

1 取組の経緯

今や学校内部だけで様々な課題に取り組む時

代ではない。大学、企業、その他の関係団体等は学校への協力を模索している。学校教育現場の連携は、ICTが結節点となることに気づいたのである。そこで、ICTを連携の要にすることで、学校外部の多様な力を学校教育現場に集中させるIHPTA役員をコーディネーターとした『大袋中コンソーシアム「つどい」』を組織した。約60団体と繋がり、様々な教育活動を行い、その実践をメディア等が紹介することで、視察、研修、協力依頼と発展し、口コミ効果もあり多くの支援者が、学校の大きな社会関係資本となっていく。

公立学校現場で、私立大学や企業といった利益追求団体等とwin-win関係を結ぶことができること、特にICTを柱にした4つの連携ができることが実証できた。

2 ICTを糸口とした4つの連携

(1) 思考力・判断力・表現力の育成をめざした実践—授業の工夫・改善

大学との連携によりiPad20台を借用し、授業を中心として活用した。生徒間相互啓発をねらいとし、様々な企業、団体との連携から生き生きとした授業の工夫・改善を図った。

(2) 自らの身を自らが守る力の育成をめざした実践

ICTを有効活用すれば、登下校安全指導にも活かせること、さらに携帯、ネットの使い方を企業や団体との連携で計画的、継続的に啓発指導することができた。

(3) コミュニケーション力・人間関係調整力の育成をめざした実践

ICTを使ったプレゼン力、発信力強化のための多様な舞台をコンソーシアムにより創出し、多くの体験活動を実施した。

(4) 情報活用力・情報編集力の育成をめざした実践

Twitter や Facebookを積極的に教育現場に導入し、情報化社会への対応力を磨いた。

3 成果と今後の展望

生徒はもとより、教職員、保護者、地域に大いなる変容がみられた。さらに単独学校のみならず共有できる仕組みづくりを進めたい。

●奨励賞【論文概要紹介】

基礎・基本の確かな定着に向けた国語科学習指導の研究

～学び手の思いに寄り添った実践を通して～

いしだ しゅういち
大分県佐伯市立鶴谷中学校 石田周一

【実践の概要】

本研究は、中学校国語科における基礎・基本の定着を、より確かなものにするために取り組んできたものである。

学習者の実態分析やさまざまな実践例及び文献を参考にしながら研究を進めてきた結果、「『学びやすさ』に配慮した授業形態」、「『学習意欲』を高める手立ての工夫」、「『学びの継続性』を重視した指導」を柱とした学習指導法を組み立て、現在実践中である。

本論文では、これまでの研究の成果と課題を報告させていただいた。

【論文内容の紹介】

1 「学びやすさ」に配慮した授業形態

本実践は、米国のCASTによる「学びのユニバーサルデザイン（UDL）2008年」の理念をもとにしたものである。「できるだけ多くの学習者が利用可能である学習環境をデザイン

すること」をコンセプトとし、授業改善に向けたポイントを次のように設定した。

- ① 学びの「見通し」がもてる授業スタイルの確立
- ② 授業の流れがとらえやすい「板書の工夫」
- ③ 「視覚的な理解」を促す掲示物の工夫
- ④ 「肯定的に評価」する言葉かけの充実
- ⑤ 一人ひとりの学習者に「活躍の場」を保障する学習活動の工夫

2 「学習意欲」を高める手立ての工夫

学習者の学びを、より主体的なものにするためには、何よりも「学習意欲」を高めることが必要であると考えた。そこで、単元学習の内容を工夫し、学習者が最後まで意欲的に取り組める学習活動についての研究に取り組み、授業に導入してきた。これまでの主な単元学習の主題名は、次のとおりである。

- ① 【小学校6年生時の担任の先生へ、新生活についての報告文を送ろう】（1年）
- ② 【東日本大震災の被災地に向けて、自分の思いを届けよう】（2年）
- ③ 【外国人用の「佐伯市観光パンフレット」を作成しよう】（2年）
- ④ 【小学校低学年向け「佐伯漁港への道案内」を作成しよう】（3年）

3 「学びの継続性」を重視した指導

基礎・基本の定着を、より効果的に促進するためには、毎日の継続した学びが有効であると考え、次のような実践を続けている。

- ① 授業開始時のペアスピーチ学習
- ② 掲示板を利用した「言語力を高める広場」の設置
- ③ 小中9年間を通した語彙指導の研究

4 成果と課題

以上のような実践を重ねることにより、徐々にではあるが、学習者の基礎・基本の定着が上向いていることが明らかとなった。

特に定着が十分でない学習者が、授業の楽しさや学習の達成感を実感することで、学習意欲を高め、それを基礎・基本の定着に向けた原動力として主体的に活動するようになったことは、この実践の大きな成果だといえる。

今後は、学校図書館の活用、他教科及び小学校との連携、外部機関との協働等、あらゆる可能性を考慮した学習活動の創造を課題とし、学習者一人ひとりのニーズにしっかりと応えられる国語科学習指導法の研究をさらに深めていきたいと考えている。

●奨励賞〔論文概要紹介〕

学習習慣を定着させる 社会科指導の工夫

北海道八雲町立熊石第二中学校 かわばたゆうすけ
川端裕介

【実践の概要】

家庭における学習習慣の定着を目指した実践を行った。学習習慣の定着には、継続性、計画性、自主性の3つを生徒が身に付ける必要があると考えた。実践する家庭学習については、取り組みやすく、かつ工夫の余地のある内容という観点から厳選した。また、優れた家庭学習については、社会科通信を活用して生徒に周知させた。さらに、2か月間隔で家庭学習について

生徒に自己評価をさせながら、指導と評価を継続した。その結果、社会科の家庭学習時間と頻度が大幅に増加した。

【論文内容の紹介】

1 主題設定の理由

家庭学習の必要性を感じていても、方法がわからず悩んでいる生徒は多い。その場合、家庭学習の重要性を教師が強調するだけでは、学習習慣は定着しない。

そこで、社会科の教科指導の工夫を図り、家庭学習の方法を身に付け、意欲を高め、学習習慣を定着させるような実践を行った。

2 研究方法

学習習慣の定着度を生徒が把握できるように、継続性（家庭学習を続ける能力）・計画性（先を見通して必要な学習を必要な時期に必要な量だけ行う能力）・自主性（自主的に学習する能力）の観点別に目標を設定した。目標は、最低目標と発展目標の2段階とした。また、2か月ごとに家庭学習を振り返る時間を授業内に設定した。授業時間を活用することで、全ての生徒に一貫した指導を行うように配慮した。その上で、個別の指導を行った。

また、家庭学習は予習型・定着型・発展型の3種に分類し、その分類を生徒に明示した。それによって、生徒が家庭学習の目的を自覚できるようにした。

3 学習習慣を定着させる実践

家庭学習の種類は、取り組みやすさと工夫の余地から、一問一答作成、ノートのフリースペース活用、地図帳への付箋貼り（地理・歴史で学習した地名の位置を確認する活動）などに絞った。他の方法は自主性に任せた。

例えば、ノートのフリースペースについては、調べ学習などに活用するように指導した。最初は家庭学習の内容を教師が具体的に例示してい

たが、次第に生徒が自ら考え、自主的に行うようになった。具体的には、近畿地方の歴史に関する地図づくりや、中部地方の産業についてウェビングマップでまとめる例が見られた。

優れた家庭学習については、毎週定期発行の社会科通信で紹介した。他の生徒にとっては参考になり、紹介された生徒にとってはさらなる学習意欲の喚起につながった。

4 成果と課題

調査期間の1年4か月間で、社会科の家庭学習の頻度が増加し、時間は平均で約2.5倍に増えた。アンケートを見ると、学習方法の習得によって生徒は自信を深め、学習意欲を向上させている様子がうかがえた。今後は、他教科や家庭との連携を図りながら、将来にわたって学ぶ意欲を持つ生徒を育てたい。